

対人関係において逃避する不登校児童生徒に 対する支援方法の検討

○白坂緋里・押江隆
(山口大学大学院教育研究科)

問題

大石(2003)によると、不登校は学校に行かないという形で自己の適応感の回復を図ろうとする2次の適応機制であり、その適応機制の中核には、学校という場における人間関係からの退避というテーマが存在していると述べている。不登校は学校の人間関係を一度遮断した状態であるため、どのような要因であっても人間関係の困難さはある程度共通する問題であると考えられる。このような不登校に共通する問題に焦点をあてて支援方法を検討する研究は見られない。そこで本研究では、不登校の要因・タイプに分けて考えるのではなく、人との関わりを避けてしまうという人間関係の困難さに焦点をあてて支援方法を検討する。

本研究では、対人的な関わりには何らかの困難を感じて人との関わりを避けてしまう不登校児童生徒を「対人関係において逃避する」と称する。その支援方法について、第1研究では支援者の視点から、第2研究では保護者の視点から、有効な支援方法を検討する。

方法

実験調査協力者 第1研究では、小・中学校の支援者8名(通常学級の教師1名、特別支援学級・学校の教師3名、養護教諭1名、スクールカウンセラー2名、フリースクールの教師1名)に対してインタビュー調査を行った。

第2研究では、不登校経験のある児童生徒の保護者2名に対してインタビューを行った。

手続き 両者とも1~1.5時間程度の半構造化面接を行った。面接内容は調査協力者の許可を得て録音し、それをもとに逐語録を作成した。第2研究については倫理審査委員会承認を得た。

質問項目 第1研究では、対人関係において逃避する不登校児童生徒の有無や、どのようなことを意識しながらどのようなことを取り組んでいるのかを中心に尋ねた。

第2研究では、不登校時の様子や、効果的な支援や効果的でないと考えられる支援を中心に尋ねた。

結果

第1研究では、「対人関係において逃避する不登校児童生徒はいるのか」という問いに対して、全員が「いる」と答えた。インタビューの内容を、KJ法(川喜多, 1967)を参考にして分類した結果、第2段階のグループ編成を行い、「当事者の特徴」, 「支援者が行った「活動内容」, 「支援者が意識したこと」の3グループが得られた。

第2研究では、Aさんは「家族ではない第三者と話ができる時間をとにかく取りたい。とにかく社会と関わって欲しい。」という思いがあり、「SCの支援」「多少強引なアプローチ」「進学についての情報提供」「学校以外の居場所作り」「親に対する支援・アプローチ」が有効な支援と考えていた。Bさんは「その子に合った環境でその子がその子らしく生活をする。」「学校復帰にこだわっていない。」という思いがあり、「ありのままを受け入れてくれる支援」「得意を伸ばす支援」「特性を考慮した支援」を有効な支援と考えていた。

考察

第1研究では人間関係の困難さという共通の問題を抱えていてもその支援の視点は多種多様であることが推測された。また、同じ職種においても異なる視点を持つことが示唆された。

第2研究では保護者の思いの方向性と上手く合致したような支援に対しては有効だと感じるということが推測された。保護者はその思いや悩みを受け入れてくれる存在によって支えられていることが示唆されたため、タイプ別に支援するといったように、支援者が一方的に方向性を示すことはかえって逆効果となることが推測される。また、保護者の求める支援者の特徴も多様であると推測された。様々な視点を持った複数の支援者を含めて相互コンサルテーションを行うことによって保護者の多様なニーズに対応できると考えられる。その際、同職種間においても視点が異なるため、どのような視点から行うかという連携が必要だと考えられる。保護者とともに多様な視点から支援を考えることが重要であると思われる。